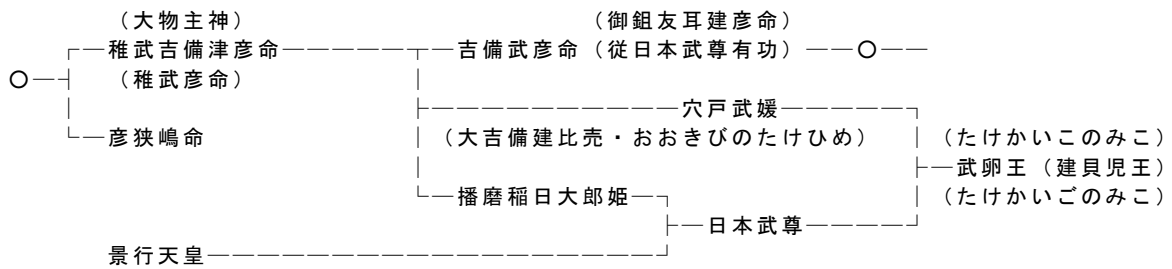


※：私は、「系図解説マニア」です。日本書紀の記述（に有ること・記述に無いこと）や、  
 〃：「系図集」の系図を眺めて系図を「パズル」のように並べて、古代を考察しています。

※：私が今回取り扱う系図と人物は、**吉備氏**と**多遲摩氏**の系図と、**神功皇后**と**武内宿禰**です。  
 〃：（干支の解説から）4世紀が解説出来れば、『武内宿禰』や『多遲摩氏』が解説できるだろう。  
 〃：この考察の最後には、これらがどう絡んでくるのか、これからの考察をお楽しみ下さい。

※：では、さっそく見ていきます。

（一つ目）：「吉備氏の系図」について：『古代豪族系図集覧』より抜粋し合成した系図。



：『古代豪族系図集覧』の「吉備氏」の系図を見て下さい。これが、吉備氏の系図です。  
 〃：「景行天皇」の位置が、「孝靈天皇」の子どもたちと同じ位置にあるのです。（不思議です。）

（二つ目）：「多遲摩氏の系図」について

〃：次は、垂仁天皇3年に来帰したという、記紀に出てくる「天日槍（天之日矛）」の問題です。  
 〃：垂仁天皇の在位の期間は、99年になっていますが、この99年を「ウソ」とするのは良いのですが、  
 〃：「天之日矛」から「神功皇后」まで、99年かかると考えたら、どうなるでしょう。

（三つ目）：「神功皇后」について

〃：日本書紀・神功皇后紀には、「氣長足姫尊」は、開化天皇の曾孫で氣長宿禰王の娘である。  
 〃：母は葛城高額媛という。と、書いてあります。これらの記述を正しいとしたら、どんな系図に  
 〃：なるのでしょうか。そもそも系図が作れるか、作れるとしたら、何が起きるのでしょうか。楽しみです。

（四つ目）：「武内宿禰」について

〃：記紀によると、武内宿禰は、「孝元天皇の」ひ孫（記では、「孫」）になります。  
 〃：成務天皇紀によると、成務天皇と武内宿禰は、同じ日に生まれています。仲哀天皇紀によると、  
 〃：武内宿禰は、大臣（おおおみ）です。そして、神功皇后紀では、武内宿禰は、神功皇后の  
 〃：そばにいますが、古事記に書かれている、父（息長宿禰王）・弟（息長日子王）は、登場しません。  
 〃：これが「有（う）：あること」と「無（む）：ないこと」です。

※：さて、ここから考察に入るわけですが、このままで考察するには、あまりにも無謀なので、  
 〃：外堀を埋めて、ある程度年代を特定していきたいと思います。

4世紀における年代特定。<『風土記』（東洋文庫）の干支から見た、即位（太歳）の推測年代>

P-283 孝靈天皇 伊賀国 孝靈天皇の時代・癸酉の歳 = 253年 孝靈天皇元年（辛未） = 251年  
 P-308 垂仁天皇 陸奥 垂仁天皇27年（戊午） = 358年 垂仁天皇元年（壬辰） = 332年  
 P-297 応神天皇 伊豆国 応神天皇5年（甲午） = 394年 応神天皇元年（庚寅） = 390年

（癸酉：みずのと・とり）（戊午：つちのえ・うま）（甲午：きのえ・うま）（壬辰：みずのえ・たつ）

※：次に、仲哀天皇ですが、古事記・日本書紀ともに、享年は52歳になっています。

記：没年の干支は壬戌（みずのえ・いぬ：362±60n）。（不採用。）

紀：即位の干支は壬申（みずのえ・さる）。没年は、仲哀9年（干支は庚辰：かのえ・たつ）。享年52歳。

〃：上記、風土記の年代から考えて、仲哀天皇329年生。372年即位。380年没。享年52歳。となります。

※：神功皇后の即位は、仲哀天皇没年の翌年ですから、摂政元年 = 381年（辛巳：かのと・み）です。

(ウィキペディアより) : 「七枝刀」

: 神功皇后52年は252年とも計算されが、紀年論では干支二巡分(120年)年代が繰り上げられていると  
: されており、訂正すると372年となって制作年の太和(泰和)四年(369年)と符合する。

:  
: 千熊(ちくま)長彦については(『百済記』では「職麻那那加比跪」と表記)、  
: 367年に新羅が百済の貢ぎ物を奪ったため、千熊長彦が新羅を責めたとある。

:  
: またその二年後の神功皇后49年(369年)春3月に、荒田別(あらたわけ)や鹿我別(かがわけ)ら  
: 軍勢を派遣して卓淳国に至り、新羅を討った。さらに百済の將軍木羅斤資と沙沙奴跪(ささなこ)らが  
: 荒田別らに協力し新羅軍をやぶり、倭・百済連合軍は、比自火本、南加羅、喙国、安羅、多羅、  
: 卓淳、加羅などの七カ国を平定し、また比利、布弥支、半古などの四つの村を平定したとある。  
: 倭国によるこれらの事蹟に対して百済肖古王が、久氐らを派遣した。その後、

:  
: 神功皇后52(372)年 秋九月丁卯朔丙子(9月10日)条に、百済の使である久氐(くてい)らが、  
: 千熊長彦の引率で来倭し、七枝刀(ななつさやのたち)、七子鏡(ななつこのかがみ)、  
: および種々の重宝を倭国へ奉った。

\*\*\*\*\*

※: 米田は、自分に都合の良い干支(年代)ばかりを集めて来て、並べているに違いない。

\_\_ : (この辺りは、その通りです。と、しておきます。先を急ぎます。)

<「仲哀天皇の即位年と生没年」についての考察> : 仲哀天皇元年 : 372年(壬申)、在位9年。

『新羅本記』より : (373年) : 百済の禿山城主が300人を率いて来降した。← : 仲哀天皇のことか。  
『百済本記』より : (373年) : 禿山城主が、300人を率いて新羅に走った。← : 仲哀天皇のことか。  
『日本書紀』より : (373年) : 仲哀天皇紀2年 : 從駕した二三の卿大夫と官人数百とで、輕行した。  
(応神天皇20年) : (409年) : 倭漢直の祖の阿知使主が、その仲間17県をひきいて、来朝した。  
『高句麗本記』\_\_ : (409年) : 国の東部に禿山城(未詳)など6城を築城し、平壤の住民を移住させた。  
: 王は南方を巡察した。

『風土記』\_\_より : 筑紫の風土記にいう。肥後の国、關宗(あそ)の県。  
(P-347) : 県の坤(こん : 西南)方20余里に一つの禿山がある。關宗(あそ)の岳という。

※ : 応神天皇元年 = 390年(庚寅 : かのえ - とら) : (壬申 : みずのえ - さる) : 從駕(じゅうか)

<「崇神天皇の即位年(300年)」についての考察> 崇神天皇元年 = 300年(干支は一致しません)

◎ : 『勸注系図』『海部氏系図』は、(定説では)後世の偽作系図ということになっています。  
\_\_ : そもそも、日本書紀そのものが、紀元前660年に、神武天皇が即位したという、トンデモな本  
\_\_ : ですから、私は、素人の系図解説マニアですので、使えるものは何でも使おうという立場です。  
\_\_ : ということで、『勸注系図』・『海部氏系図』は、正しいかどうかを確かめたいと思います。

(仮説) : 少なくとも、『勸注系図』・『海部氏系図』の(年代の)干支は(すべて)正しいとして、  
: 干支を基準に、並べ替えてみました。(カッコ内の西暦は、米田が追記したものです。)

「  
| 『崇神の壬戌(302年)年春三月、豊鋤入姫命、天照大神を戴(いただ)き、 ← : 『勸注系図』  
| 大和国笠縫の里から、丹波の余社郡(よさのこおり)久志比之真名井原匏宮に移る。  
| (くしひのまないはら - よさのみや)  
| 三十九年壬戌(302年)。但波(たんば)の吉佐宮(よさのみや)に遷し奉る。 ← : 『倭姫世紀』  
| 崇神即位六年己丑(305年)。秋九月倭笠縫邑に、草薙剣を遷奉(うつしたてまつる) : 『倭姫世紀』  
| 丙寅(306年)年秋七月(四年後)に、また大和国伊豆加志本宮に遷ったとする。』 ← : 『勸注系図』  
| (いずかしもとみや)  
| 四十三年丙寅(306年)。倭国伊豆嘉志本宮に遷し、八年齋(いつき)奉る。 ← : 『倭姫世紀』  
| (やまとのくにいづかしもとみや)

※：『倭姫世紀』の崇神即位六年己丑（つちのとうし：305年）を正しいとすると、  
：「崇神天皇」元年は300年になります。そうすると、上記『勸注系図』『海部氏系図』の年代は、  
：（垂仁天皇元年＝332年、ですから）すべて、崇神天皇の時代に、収まることが分かります。

※：ここで大切なことは、実際に歩き回っているのは、「豊鋤入姫命」です。  
―：『倭姫世紀』・『勸注系図』においては、まるで、「豊鋤入姫命＝倭姫命」を前提にして  
―：年代が語られているということです。（この辺に、何かトリックがありそうです。）

『新羅本記』より：（300年）：基臨尼師今：倭国と国使の交換をした。  
『高句麗本記』―：（300年）：美川王が王位についた。・・・・・・崇神天皇の即位と同年。

『新羅本記』より：（312年）：訖解尼師今：倭国王が使者を派遣して、王子の花嫁を求めてきたので、  
：阿滄の急利の娘を〔王子の花嫁として〕倭国に送った。

『高句麗本記』―：（314年）：斯由（故国原王）は、太子となった。・・父親になることが太子か。  
：（332年）：故国原王は、王位についた。・・・・・・垂仁天皇の即位と同年。

※：想像として、倭国の王子とは、「垂仁天皇」のことで、花嫁は、「狭穗姫」と、推測したいです。

―：『日本書紀』より：垂仁天皇は、24歳で皇太子となった。  
―：314年に立太子とすると、（誕生は）291年生になる。332年即位とすると、この時、42歳。  
―：没年を39年とすると370年没。享年80歳。（高齢ですが、可能な年齢・享年です。）

\*\*\*\*\*

※：私は、記紀の系図に、幾つか疑問を持ちました。その一つは、「日本武尊」の系譜でした。

―崇神天皇―垂仁天皇―両道入姫命―  
―崇神天皇―垂仁天皇―景行天皇―日本武尊―仲哀天皇

※：この系図を見て、日本武尊は、両道入姫命と結婚して、子どもを作れるか、ということです。  
※：古代の女性の出産可能年齢を「14～30歳」、男性の生殖可能年齢を「18～70歳」とした時、  
―：日本書紀が正しいとして、これを証明できるでしょうか。  
※：私（米田）は、日本書紀・古事記の系図は無理と考えました。そして、下図を考えました。  
―：これが、系図解読のスタート（の、ひとつ）でした。

―崇神天皇―垂仁天皇―両道入姫命―  
―景行天皇―日本武尊―仲哀天皇

※：ここまでのまとめをすると、次のようになります。

（日本書紀の記述）：

―孝元天皇―開化天皇―崇神天皇―垂仁天皇―景行天皇―日本武尊―仲哀天皇―○―  
―孝元天皇―彦太忍信命―○―武内宿禰・・・・・・（武内宿禰は、生存不可能）  
| ←（記では、一世代）→ |

（古事記の両道入姫命と、日本書紀の日本武尊の記述を、考慮すると、）

―開化天皇―崇神天皇―垂仁天皇―両道入姫命―  
―景行天皇―日本武尊―仲哀天皇  
※＜日本書紀の見直し＞  
―：続柄表記の見直し  
―孝元天皇―彦太忍信命―○―武内宿禰・・・・・・（生存可能）  
| ←（記では、一世代）→ |  
―：在位期間の見直し  
―：在位の順番の見直し

※：日本書紀は、天皇の即位の順番を含め、色々と細工をしているようです。  
―：武内宿禰を調べることで、日本書紀のウソ（トリック・細工・改ざん）が見えてくると思います。

※：そこで、日本書紀のウソ（トリック・細工・改ざん）を見ていくのですが、  
\_\_：ここで、参考になるのが、天神系「中臣氏」の系図になります。  
\_\_：歴史の大事なところに、日本書紀では、ちょこちょこと、中臣氏の名前が出てきます。

◎：「中臣氏」の系譜を並べると、年代（歴史の物差し）として見えてくるものがあります。

- (始祖) 天御中主尊 : (以下07世の孫まで、省略)
- (08世の孫) ・ ・ 居々登魂命
- (09世の孫) ・ ・ 天兒屋根命\_\_ : (天の岩屋の段に登場) ・ ・ ・ 「天照大神」はこの時代の人。
- (10世の孫) ・ ・ 天押雲命
- (11世の孫) ・ ・ 天種子命\_\_\_ : (神武天皇紀に登場)  
: (風土記) : 伊勢の国は、天御中主尊の12世の孫の天日別命が平定した所である。
- (12世の孫) ・ ・ 宇佐津臣命 ※: 天日別命は、天の磐船のモデルと思われる。
- (13世の孫) ・ ・ 御食津臣命
- (14世の孫) ・ ・ 伊賀津臣命\_\_ : (風土記: 近江国) : 伊香刀美は、「天女の妹」と夫婦になった。
- (15世の孫) ・ ・ 梨迹臣命\_\_\_\_\_ (兄: 臣知人命: 伊香連祖)
- (16世の孫) ・ ・ 神間勝命\_\_\_\_\_ (同世代: 角豆命)
- (17世の孫) ・ ・ 久志宇賀主命\_\_ (同世代: 古加斐命: 崇神朝奉齋伊香具神)
- (18世の孫) ・ ・ 国摩大鹿嶋命\_\_\_\_\_ : 垂仁天皇紀の「五大夫」のひとり
- (19世の孫) ・ ・ 巨狭山命\_\_※: 津守: 度見媛命 (巨狭山命妻・雷大臣命母) = 「菅竈由良度見」
- (20世の孫) ・ ・ 雷大臣命 (鳥賊津使主: 仲哀朝大夫) \_\_\_※: 「度見媛命」 = (神功皇后の祖母)
- (21世の孫) ・ ・ 大小橋命
- (22世の孫) ・ ・ 中臣阿麻毗舍
- (23世の孫) ・ ・ 阿毘古 ※: 仁徳天皇紀: 依網 (よさみ) の屯倉の阿弭古 (あびこ) が、云々。

※：ここからは、系図の解説作業になります。(マニアックな話ですが、お付き合い下さい。)

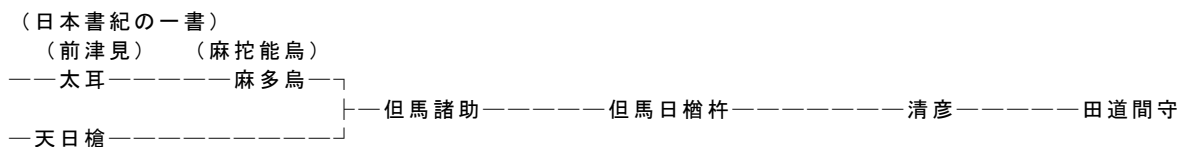
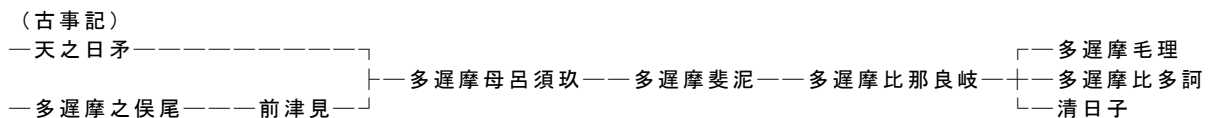
◎：(独自の) 系図解説の方法：

(その1) : 記紀の続柄の記述は、(古代の常識に従って) 一応、全て正しいとして考えてみました。  
: その「古代の常識」とは何かといいますと、(結論だけを書きますと、) 下記の3点です。

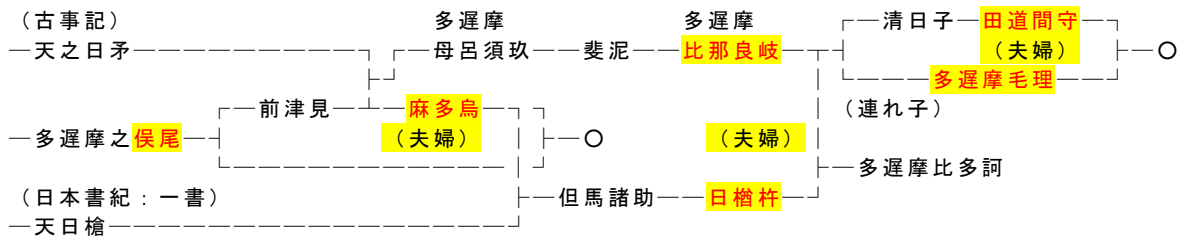
- \_\_ : ①娘婿は、子ども(実子)扱いとして、系図に組み込む。
- \_\_ : ②夫婦の連れ子は、子ども(実子)扱いにして、系図に組み込む。
- \_\_ : ③古は、兄弟長幼を言わず、女は男を兄(せ)とよんだ。男は女を妹(いも)とよんだ。
- \_\_ : (仁賢天皇紀より)

(その2) : 記紀に書かれている記述に矛盾がある場合には、「同名は、夫婦である。」と考えました。  
: 系図において、「同名は、親子・兄弟姉妹」と考えていましたが、「多遲摩氏」の系図の  
: 解説においては、「同名は、夫婦(または、一書においては別人)である。」と考えました。

※：「矛盾の中に真実が隠れている」・・・(米田は) 偽書でも何でも、使えるものは何でも使います。

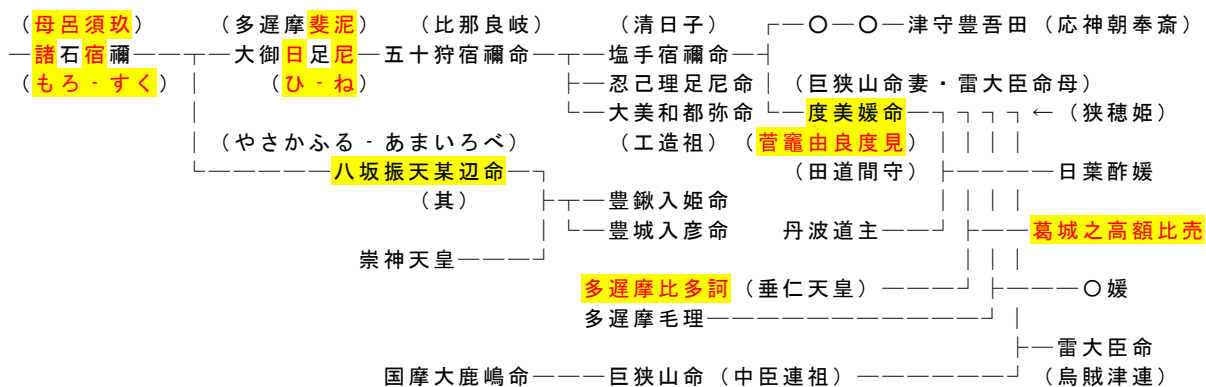


※：「多遲摩」と「但馬」の系図を(無理やり)合成すると、次図のようになりました。  
\_\_：系図の作り方は、人物を「パズル」のように(繰り返し)並べて、条件が合うものを探します。  
\_\_：結局、同名の3組は、夫婦になりましたが、「ひぼこ」と「もろすく」は、別人になりました。



※：『古代豪族系図集覧』には、多遲摩氏（但馬氏）と婚姻関係を持つ氏族の系図が載っています。

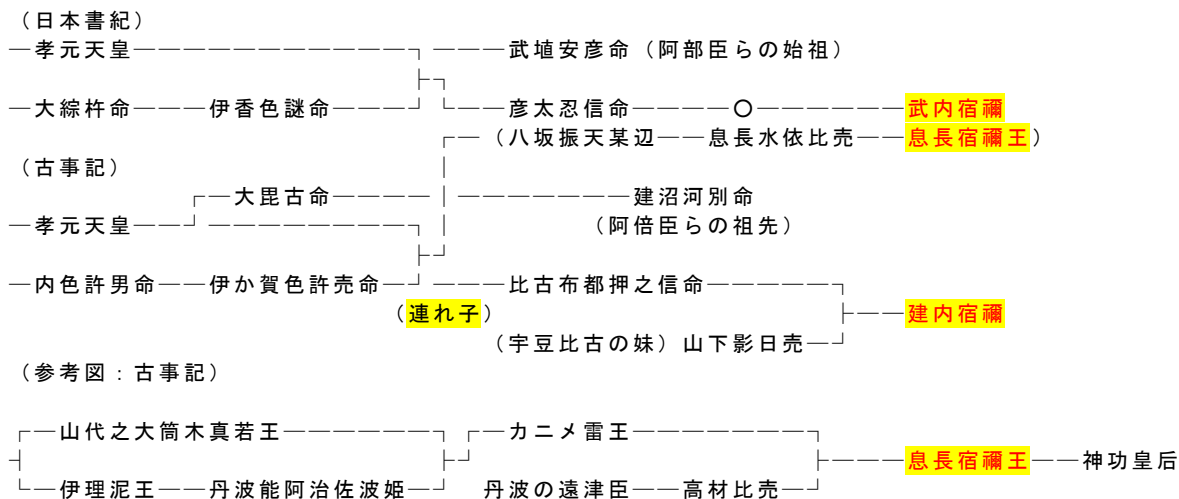
○：「津守氏の系図」（『古代豪族系図集覧』P-246：住吉神社神主家）と日本書紀などの合成図。



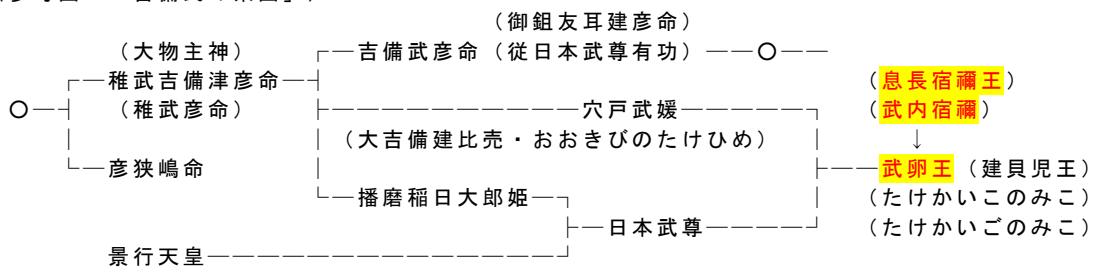
※：多遲摩（但馬）氏の系図は、保留にして、次は、「武内宿禰」の系図の考察です。

—：私は、（完成を信じて）強引に、系図の合成をしました。（何百枚も系図を並べました。）

—：人物を重ね、男を女に変え、実子を連れ子に変え、同名を夫婦に変え、・・・。



(参考図：「吉備氏の系図」)



---

※：完成した系図は、「武内宿禰」＝「息長宿禰王」＝「武卯王（建貝児王）」です。

—：系図（合成図）は、別紙の通りです。（始祖や祖先の扱いは、尊重しました。）

---

※：「日本書紀」の記述より

：気長足姫尊（神功皇后）は、開化天皇のひ孫で、気長宿禰王の娘である。母は「葛城之高額媛」という。

※：狭穂彦の玄孫の「齒田根命」が云々。：「玄孫」の一例（想像図）

（武淳川別命） （子） （孫） （ひ孫） （玄孫）  
—大彦命—狭穂彦（酢鹿之諸男）—五百城入彦皇子—若野毛二俣王—忍坂大中姫命—雄略天皇

---

（終わりに）：日本書紀が書こうとしている時代の「日本」は、どんな時代だっただろうか。

---

：私は、日本は、たくさんの国から成る「連邦国家」で、連邦のトップは、「天照大神」のような  
：（皇太后のような）女王だったと考えています。そして、「天孫降臨」のように、  
：それぞれの国に対して、自分の兄弟・息子・甥・孫（さらに、それぞれの連れ子）などの中から、  
：適任者を「王」として任命・派遣していたと考えています。

：私は、（7世紀の）三国・倭国日本の王族・皇族などは、すべて紀元前後（紀元1～2世紀）の  
：何世代にもわたる「多婆那国（おそらく丹波の国）」の女王の子もたちの子孫と考えています。

：朝鮮半島の国々は、中国や匈奴などの侵略を受けているために、何度も、国の滅亡を経験して  
：います。その（国の滅亡の）たびに、（半島から見れば）分家筋に当たる、倭国から、王を  
：迎い入れています。ですので、三国・倭国・日本は、大きな一つの連邦国家だと考えています。

---

※：：日本書紀は、歴史の何を改ざんしてきたか。そして、そのトリックの手口は何か。

---

阿倍宿奈麻呂（あべ の すくなまろ）は、飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけての公卿。

氏姓は引田朝臣のち阿倍朝臣。筑紫大宰帥・阿倍比羅夫の次男。

官位は正三位・大納言。少麻呂とも表記される。

算術に優れ、藤原仲麻呂に算術を教授したという。

官歴

※ 『続日本紀』による。

時期不詳：従五位上

大宝2年（702年） 12月23日：造大殿垣司（持統上皇崩御）

時期不詳：従四位下

慶雲元年（704年） 11月14日：引田朝臣から阿倍朝臣に改姓

時期不詳：従四位上

慶雲4年（707年） 10月3日：造御竜司（文武天皇崩御）

和銅元年（708年） 3月13日：中納言 [4]。7月15日：正四位上。9月30日：造平城京司長官

和銅2年（709年） 正月9日：従三位

靈龜3年（717年） 正月4日：正三位

養老2年（718年） 3月10日：大納言

養老4年（720年） 1月27日（720年3月10日）「阿倍宿奈麻呂」死去。

『続日本紀』の養老4年5月癸酉条には、

「先是一品舍人親王奉勅修日本紀 至是功成奏上 紀卅卷系圖一卷」とある。

養老4年（720年） 8月3日（720年9月9日）「藤原不比等」死去。

( : 追加の資料)

※ : シンメトリック論というのは、(作られた在位年数が)上下で対称になっていることを指しています。  
\_\_ : 合計 481 年というのは、① : 上下それぞれの和です。② :  $37 \times 13 = 481$ 、という分け方もできます。  
\_\_ : ③さらに、 $60 \times 8 + 1 = 481$  年、という分け方もできます。( + 1 で、同じ干支に戻ってきます。)

※ : この①が、(「16/YXRFBRM」氏が発見したシンメトリック論)。  
\_\_ : この②が、( marishi 氏による37倍数論)。  
\_\_ : この③が、「シンメトリック米田論 : (干支年)  $\pm 60n$  論」。

<風土記 : 伊賀国>

※ : 伊賀の国は昔伊勢の国に属していた。孝霊天皇の御宇 (みよ) の癸酉 (みずのと・とり : 253 年)  
\_\_ : の歳にこれ (伊勢の国) を分かって伊賀の国とした。(孝霊天皇元年の干支は、辛未 : AD251 年)

※ : (「16/YXRFBRM」氏が発見したシンメトリック論) ( marishi 氏による37倍数論)

第07代	孝霊天皇	辛未	BC290	76年			
第08代	孝元天皇	丁亥	BC214	57年	133年		
第09代	開化天皇	甲申	BC157	60年	60年		
第10代	崇神天皇	甲申	BC97	68年	68年		
第11代	垂仁天皇	壬辰	BC29	99年	99年		
第12代	景行天皇	辛未	AD71	60年			
第13代	成務天皇	辛未	AD131	60年 + 1年	121年	( $37 \times 13 = 481$ 年)	
第14代	仲哀天皇	壬申	AD192	09年			
摂政	神功皇后	辛巳	AD201	69年			
太歳		己丑					
第15代	応神天皇	庚寅	AD270	41年 + 2年	121年		
第16代	仁徳天皇	癸酉	AD313	87年			
第17代	履中天皇	庚子	AD400	06年			
第18代	反正天皇	丙午	AD406	05年 + 1年	99年		
第19代	允恭天皇	壬子	AD412	42年			
第20代	安康天皇	甲午	AD454	3年			
第21代	雄略天皇	丁酉	AD457	23年	68年	( $37 \times 8 = 296$ 年)	
第22代	清寧天皇	庚申	AD480	05年			
第23代	顕宗天皇	乙丑	AD485	03年			合計 : 481 年
第24代	仁賢天皇	戊辰	AD488	11年			
第28代	宣化天皇	丙辰	AD536	04年	60年	( $37 \times 5 = 185$ 年)	
第29代	欽明天皇	庚申	AD540	32年			
第39代	弘文天皇	壬申	AD672	01年	133年		

※ : 「シンメトリック米田論 : (干支年)  $\pm 60n$  論」

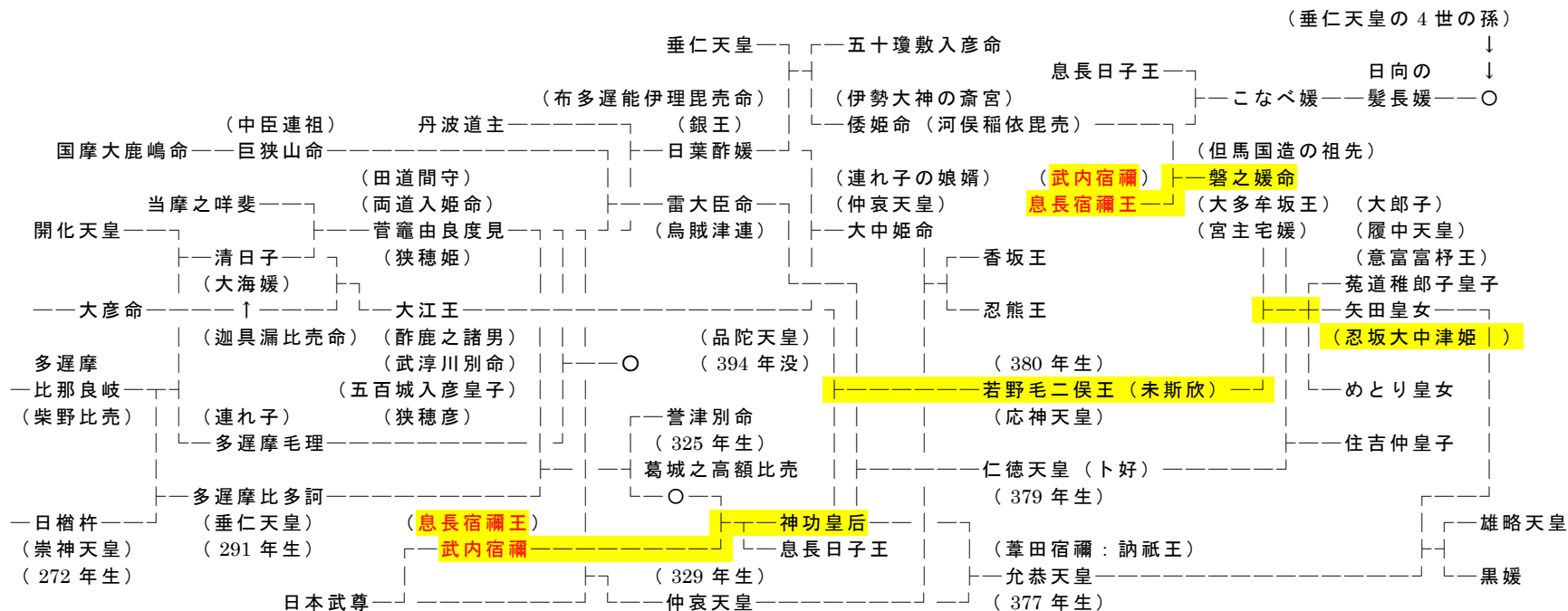
\_\_\_\_\_ (公式太歳年) \_\_\_\_\_ (実際の基準年) \_\_\_\_\_ (太歳)

孝霊天皇	BC290 年	← 540 年差 →	AD251 年	(AD251 年・辛未)
孝元天皇	BC214 年	← 480 年差 →	AD267 年	(AD267 年・丁亥)
開化天皇	BC157 年	← 420 年差 →	AD264 年	(AD264 年・甲申)
崇神天皇	BC97 年	← 360 年差 →	AD264 年	(AD264 年・甲申) ≠ 300 年
垂仁天皇	BC29 年	← 300 年差 →	AD272 年	(AD332 年・壬辰)
景行天皇	AD71 年	← 240 年差 →	AD311 年	(AD311 年 / 251 年・辛未)
成務天皇	AD131 年	← 180 年差 →	AD311 年	(AD311 年・辛未)
成務60年合計 (481 年)			合計 (121 年)	(AD371 年・辛未) 合計の差 (360 年)

仲哀天皇	AD192 年	← 180 年差 →	AD372 年	(AD372 年・壬申)
神功皇后	AD201 年	← 180 年差 →	AD381 年	(AD381 年・辛巳)
応神天皇	AD270 年	← 120 年差 →	AD390 年	(AD390 年・庚寅)
仁徳天皇	AD313 年	← 60 年差 →	AD373 年	(AD373 年・癸酉)
履中天皇	AD400 年	(ほぼ 0 年差)	AD400 年	(履中天皇の誕生年か)
反正天皇	AD406 年	(ほぼ 0 年差)	AD406 年	(反正天皇の誕生年か)
允恭天皇	AD412 年	(ほぼ 0 年差)	AD412 年	(AD412 年・壬子)
弘文天皇	AD672 年	合計 (481 年) ←→	(301 年)	(AD672 年・壬申) 合計の差 (180 年)

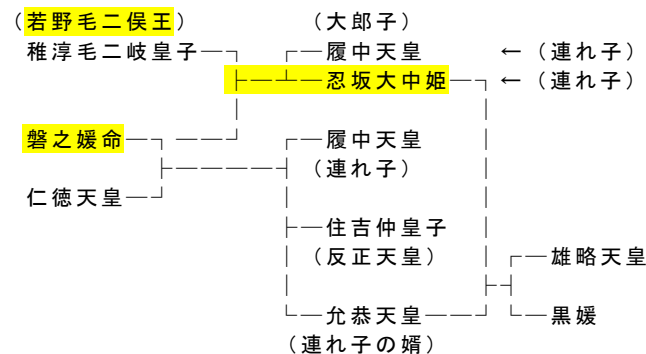
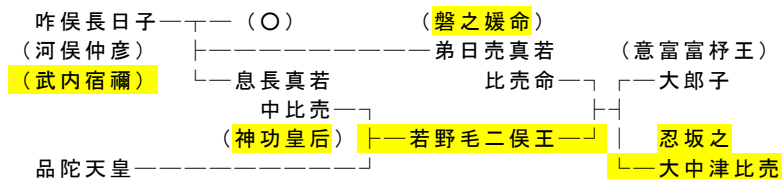






: <『磐之媛命』の「連れ子」や「娘婿」を、子ども扱いにした系図>  
 (反正天皇は住吉仲皇子としておきます。)

: 『古事記』 応神天皇記から、若野毛二侯王の記述



※ : <自作の系図です。>